

述

成

底本

対校本

端

異

秘

関

籙

瑞空祥純写本を森英純が写したもの。

瑞空本中に出だせるもの

浄土宗西山流秘要蔵所収本

関本諦承校正本

稲垣真哲校正本（「禅林学報」所収）

* 本文中のゴシック体の文字と（ ）内の文字とは編者加筆

述^① 成 (述誠)

問^② 実信房
答^③ 善恵上人

第一

序分義の始め、証信序の法門終りて後、別に尋ね申す。

⑦ 今、往生は南無阿弥陀仏と心得て候ひけり。是に付きて、南無を彼の釈に帰命と候。帰命は、命を帰すと書きて候。されば、正しく願体に歸し候ひぬるものならば、帰命の謂れ立つべく候。其の帰命の謂れ立ちぬる姿を云何にしてか知り候はんずるぞ。唯南無阿弥陀仏と申して疑ひ無く往生し候べきぞ、と思ひ定め候べきか。又止悪修善の道理をも控へなんとしたる分齊にて、念仏申し候はんずるか。帰命の心の立ちたる色とは、如何様に心得べく候やらん。又往生一

① 圓融隨述成「述誠」

② 圓問実信房「実信問」

圓「問実信(房)」

③ 圓答善恵上人「答善恵上人」

圓「善恵上人御答」

圓「(御)答證空(上人)」

④ 圓隨始「初」

⑤ 圓後「なし」

⑥ 圓隨圓に「して」

⑦ 圓隨今「今の」

⑧ 圓彼の釈に「なし」

⑨ 圓隨候「積し候」

⑩ 圓隨歸命「此の歸命」

⑪ 圓ものならば「物こそ」

⑫ 圓隨其「此」

⑬ 圓立ちぬる姿を「立する体をは」

⑭ 圓し候べきぞ「すべき」

圓「し候ぞ」

⑮ 圓をも控へなんと「をも引へんと」

圓側註に「をひるかへ」

圓「を別たんと」

⑯ 圓圓隨如「なし」

定と思ひ候はば、命を惜まず、一向念仏申さんずるぞ、帰命の心立ちたるぞと思ひ定むべきにて候やらん。

御答ありて曰く。是に殊勝の事あるなり。左右なく申すべきにあらねども簡程の御尋ねに付きて、申さでもあるべからず。念仏往生と申すにつきて、諸師の心と、和尚の心と大いに替るなり。諸師は、唯六字の名号目出度き事を嘆じて、衆生が唱ふる功德にて往生を得るぞと釈し、或は又、三字を法報応の三身に配て、空仮中の三諦にも配て、或は、法身般若解脱の三徳にも配てて積すれども、南無の体を積することは、すべてなきなり。

然るに善導一師は、阿弥陀の三字を委しく積せずして、南無の二字を積し給ふなり。此の南無を帰命と積せらるるなり。帰命につきて故上人、観仏念仏の兩三昧あるべしと料簡せられて、その観仏の帰命は機に付き、念仏の帰命は仏体に付きて料簡せらるるなり。

此の帰命といふは、命を仏に奉る意なり。されば此を積するに、

- ①圓ひ候「なし」
②圓一向「向すら」
③圓「ひたすら」
④圓歸念仏「念仏を」
⑤圓「こそ」
⑥圓歸ありて「に」
⑦圓歸付きて「付きては」
⑧圓和尙「導師」
⑨圓「善導」
⑩圓心と「心意は」
⑪圓替る「異なる事」
⑫圓諸師は「なし」
⑬圓名号「なし」
⑭圓歸「名号の」
⑮圓事「なし」
⑯圓和尙「導師」
⑰圓歸が「の」
⑱圓積すれども「なし」
⑲圓なきなり「之れ無し」
⑳圓南無「南無の二字」
㉑圓積せらるる「積し玉ふ」
㉒圓歸命「此の帰命」
註 法然上人をさす。
㉓圓故上人「古上人」
㉔圓兩三昧「兩三昧の帰命」
㉕圓歸て「き」
㉖圓歸歸きて「くと」
㉗圓せらるるなり「し給へり」
㉘圓歸意「心地」

衆生の重ずる所、命に過ぎたるは無し、此の法財を仏に献ずと積せられたり。されば、先には、衆生の方より命を惜まず仏に帰する事にてあるべきなり。是を帰命の体とす。

是に付きて、我等が心に引乗せて分別すれば誠に命を惜まず仏に帰するかと覚ゆるに、口には南無阿弥陀仏と云へども、心には命を惜みたる故に、觀仏の帰命は立たざるなり。是を以て、命を惜まずして往生す、といはば、我等が往生は思ひ切るべきなり。

然るに、念仏の帰命の、仏体につきて云へば、先づ彼の阿弥陀仏の覺体にこの命を惜みたる我等凡夫を自ら撰して成仏したまへる故に、今始めて命を帰せざれども、彼の仏体に往生は成ぜられけり、と意得べし。これすなはち、一心廻願往生淨土為体なれば、衆生の往生を覺体に成じ玉へるなり。

南無といふは、正しき我等が体なり。即ち三心なり。故に此の南無が阿弥陀仏の体に具せられて名号となるぞ、と心得る所が、往生

① 國衆生の…無し「衆生所重無過命」

② 秘法財「宝財」

釋「重宝」

③ 觀仏「諸仏」

④ 國國國國國獻ず「奉る」

⑤ 國先には「先づは」

釋「先」

⑥ 國驛より「よりして」

⑦ 國引乗せて「引うけて」

釋「引乗て」

⑧ 國國すれば「するに」

⑨ 國命を「なし」

⑩ 國國に「所」

⑪ 國阿弥陀仏「南無」

⑫ 國國國是「安」

⑬ 國す「する」

⑭ 國國つきて云へば「付くと云は」

⑮ 國に「なし」

⑯ 國命を「なし」

⑰ 國國國なれば「と云ふ、されば」

⑱ 國の往生「なし」

⑲ 國南無「此南無」

⑳ 國國き「く」

㉑ 國の体「なし」

㉒ 國られて「らるるが」

にてあるなり。是くの如く心得る時、命を惜めば往生すまじきにて
は無きなり。此の謂れを心得る所を、即便往生と名付くるなり。さ
れば正しく往生の体は此の三心にて、南無阿弥陀仏に極まるなり。

他力といふは機によらぬ事なり。機によらねば、一向仏体に付く
るなり、故に南無を具して覚体を成じたまへるところが正しく他力
往生にてありけるぞと心得る外には、三心具足の色、別にあるべか
らず候。されば能く能く我が身の有様をあきらめ持つとも、命を惜
みたる身ぞ、と思ひ知るべきにてあるなり。今、別願の体が正しく
此の機を自ら仏体に具足したまひける故に、我等が往生は他力にて
成ずるぞと申すなり。それを、我と命を惜まぬ位になりたるこそ帰
命とはいへ、と云ふは僻事なり。若し爾れば、惜まずば往生し、惜
まば流転すべきに当れり。故に無有出離之縁の信を思ひ切りたる機
の上に、往生すやせずやといはば打ちまかせては往生すまじき、と
いふべき所なり。是に今、命を惜みける者を撰取したまひける仏ぞ

① 圓圓體時「時は」

② 圓圓體と「とは」

③ 圓されば「なし」

④ 圓く「き」

⑤ 圓南無阿弥陀仏に「南無の体
に」

⑥ 圓「南無の体と」

⑦ 圓故に南無……ありけるぞ「なし」

⑧ 圓心得る「心得るより」

⑨ 圓圓體候「なし」

⑩ 圓圓あきらめ持つとも「明めば」

⑪ 圓今「爰は今」

圓「爰に今」

⑫ 圓と「が」

⑬ 圓體とはいへ、と云ふは「と云
へると云ふ義は」

⑭ 圓僻「邪」

⑮ 圓爾れば「爾者」

圓「然は」

圓「しからば」

⑯ 圓ずば「されば」

⑰ 圓まば「めば」

⑱ 圓圓の信を「と信ずるを」

圓「と信ずる」

註「徹底的に信じ切った者」の意

⑲ 圓圓體といはば「と云ふは」

圓なし

⑳ 圓べき「なし」

と心得る所^①を、今の信心とはいふなり。命を惜まば^②帰命の謂れ立たざるには^③あらず、かかる機を捨てたまはず来迎引接したまふ所を、以無縁慈撰諸衆生とは説かれたるなり。此の謂れを心得ての上には、又機に立ち歸りて、形^{かた}の如く、分々に帰命の心必ず立つべきなり。

是れ先師^④上人の口伝の義なり。聴聞四十余年^⑤が間上人に付き随ひ奉りたるに、四十余年^⑥の後、此の法門を授けられたり、と正しく書き付けられたり。

第二

述重^⑦ねて問ふ。さては、命惜む位なるものを、往生浄土為体と成じて、仏の成仏が衆生の往生にて候はば、何となくとも仏体に南無の具足せし^⑧所が往生にてありければ、往生すべきにて候か。

御答。さなり。上人の仰せに曰く、所詮往生の信心といふは唯是^⑨にてあるなり。是を顯はさんが為にくれぐれ法門を申すなり。此を

① 圓融圓融所「なし」
 ② 圓融圓融まば「めば」
 ③ 圓融にはあらず、かかる「なし」

④ 圓先師「古」

⑤ 圓融圓融四十「二十」

⑥ 種が「の」

⑦ 隨隨ひ「なし」

⑧ 圓融圓融四十「二十」

圓異本に「二十」

⑨ 圓融余「なし」

⑩ 圓融述重ねて「なし」

圓「重ねて」

⑪ 圓融命「命を」

註「自然に」の意

⑫ 隨隨「なし」

⑬ 圓融圓融し「る」

⑭ 圓融往生す「往生すべしと心得」

圓「往生すべきと心得」

⑮ 隨隨せに曰く、所詮「仰せは詮ずる所は」

圓「仰せの詮ずる所は」

⑯ 圓是「此等」

⑰ 圓くれぐれ「くれぐれと」

圓「異々と」

分別せずしては往生は叶ひ難くこそ、能く能く思ひ分くべき事にてあるなり。

第三

同日戌時に御使を以て仰せらるる事

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱
昨宵の程は昼の法門をも沙汰せられぬ事、返す返す不審に覚え候。其の要を取りて今朝申しつる帰命の二重念仏の事、よくよく心得あるべきなり。

南無を本として、是に阿弥陀仏を具足する所は、願行具足の南無阿弥陀仏にてあるなり。是を観仏三昧と名づくるなり。阿弥陀仏を体として、是に南無を具足する所を、行願具足の、阿弥陀仏の南無にて、仏体が本となりて衆生を撰取するなり。是を念仏三昧の帰命の仏体に付くとは申すなり。然れば往生を判ずるには、行願具足して往生すべきにて、一心廻願往生浄土為体と釈して、衆生の往生を以て彼の仏の成仏の体と心得る時、往生は決定するなり。是を一切

① 綱難くこそ「難きを」
② 綱「難きに爰を」
③ 綱「有るなりと云云」
④ 綱「同日」
⑤ 綱「使い」
⑥ 綱「便り」
⑦ 綱「返す返す」
⑧ 綱「其の要を取りて」
⑨ 綱「念仏」
⑩ 綱「あ」
⑪ 綱「ら」
⑫ 綱「者」
⑬ 綱「は」
⑭ 綱「なし」
⑮ 綱「三昧」
⑯ 綱「云ふ」
⑰ 綱「に帰する」
⑱ 綱「得」

善悪凡夫得生者等と積するなり。此の依文の法門より念仏に入らんとするは、観仏三昧より念仏に入る故に、端より奥にいたるは大事なり。此の玄義念仏三昧の道理を心得ての上に、依文に付きてあきらめ沙汰するは、是れ奥より端に至る故に易きなり。

されば唱ふる功によりて往生するぞと申すにはあらず。仏体が往生の体にてありけりといふなり。是を能く能く心得べきなり、と仰せられきとなり。

御返事に申す。

此の仰せ、実に甚深に覚え候、今往生一定し候ぬと覚え候なり、と云ふ。

第四

群疑論(七卷五丁左有二種云云)に無記の往生を立つるに、これを失念する機の体といふなり。さて無記になる始め、善心発りて無記になるは往生なり。悪心に住して無記になるは往生すべからずと定むる

① 器此の依文の「なし」
翻「これを依文の」

② 翻「念仏」「此の道理」

③ 翻「觀佛三昧」「なし」

④ 翻「玄義念仏三昧の」「なし」

⑤ 翻「心」「なし」

⑥ 翻「依」「なし」

⑦ 翻「是」「なし」

⑧ 翻「觀佛三昧に」「へ」

⑨ 翻「往生する」「出る」

⑩ 翻「佛の体」「なし」
翻「異本になし」

⑪ 翻「ありけり」「有るなり」

⑫ 翻「能く」となり「「れ候」」

⑬ 翻「被仰云云」

⑭ 翻「るるなり云云」となり

⑮ 翻「御返事に申す」なし

⑯ 翻「實に」「なし」

⑰ 翻「定」「決」

⑱ 翻「して候はぬ」「しぬ」

⑲ 翻「して候はぬ」

⑳ 翻「七卷五丁左有二種云云」あり
翻「なし」

㉑ 翻「私註七卷五丁左有二種云云」

㉒ 翻「これを」「なし」

㉓ 翻「する」「するは」

㉔ 翻「いふなり」「云はば」

㉕ 翻「無記に」「なし」

なり。然れば彼の論は猶善心ある方は往生すといふ故に、善根成就の機を取るなり。是猶觀仏三昧の位なり。今失念の機、善根成就せざる凡夫を体とすといふは、機の、左あればかかればと騒ぐ心を按へて、斯る疑ひの機、信心一つも無き機を本として撰取して正覚を成じたまへる仏体にて在しけるよと思ひ付く所を、今の他力の信心とは云ふなり。云何にも此の疑ひ騒ぐ意を静めての上に、本願の体を心に懸けて念仏して往生すといふ分は、尚機を本とする故に、真実他力の信心にては無き者なり。

念仏といふは他力なり。他力といふは我が心を本とせず。偕て我が心は是れ何時も疑ひあきらめずして、最後臨終の時に本願をひとすじにたのむ心は無くして、如何あらんずらん、地獄にや堕ちんずらんとのみ騒ぎ疑はるるなり。是を凡夫の体とはいふなり。無有出離之縁の機とは是なり。此の機の体をはたらかさずして撰取したまふ所が、真実の他力本願の不思議にては有りと思ひ付くばかりな

- ① 極圓方「分」
- ② 極往生「故に」なし
- ③ 極善根「菩提」
- ④ 極を「に」
- ⑤ 極圓是猶「故に」
- ⑥ 極「故に是れ猶」
- ⑦ 圓體を体とすと「の体と」
- ⑧ 圓「一」
- ⑨ 圓かかれば「かくれば」
- ⑩ 圓「かくれば」
- ⑪ 圓「角あれば」
- ⑫ 圓「騒ぐ」
- ⑬ 圓「騒ぎ」
- ⑭ 圓「機」
- ⑮ 圓「御座」
- ⑯ 圓「御座」
- ⑰ 圓「御座」
- ⑱ 圓「御座」
- ⑲ 圓「御座」
- ⑳ 圓「御座」
- ㉑ 圓「御座」
- ㉒ 圓「御座」
- ㉓ 圓「御座」
- ㉔ 圓「御座」
- ㉕ 圓「御座」
- ㉖ 圓「御座」
- ㉗ 圓「御座」
- ㉘ 圓「御座」
- ㉙ 圓「御座」
- ㉚ 圓「御座」
- ㉛ 圓「御座」
- ㉜ 圓「御座」
- ㉝ 圓「御座」
- ㉞ 圓「御座」
- ㉟ 圓「御座」
- ㊱ 圓「御座」
- ㊲ 圓「御座」
- ㊳ 圓「御座」
- ㊴ 圓「御座」
- ㊵ 圓「御座」
- ㊶ 圓「御座」
- ㊷ 圓「御座」
- ㊸ 圓「御座」
- ㊹ 圓「御座」
- ㊺ 圓「御座」
- ㊻ 圓「御座」
- ㊼ 圓「御座」
- ㊽ 圓「御座」
- ㊾ 圓「御座」
- ㊿ 圓「御座」

り。と正しく仰せられき。

第五

四月四日の御文なり。

念仏は此れ他力の行といふ事は人ごとに思へども、眞実他力に正しく帰することが極めて有りがたきことにて候なり。先づ打ちまかせて人の思へるは、念仏三昧は行なり。其の中に安心は、一口にても唱ふれば往生疑ひなかるべし、行は他力なれば別に仔細は無けれども、安心といふものが大事にて、往生を人ごとにせぬと思ふ人もあり。或は行は他力なれども、常に相統せぬ故に往生は叶はぬといふ人もあり。此も本願にはのぞくなり。

今、此の本願の名号には、五劫思惟の心内に南無の衆生をのせて願じ、兆載永劫の万行は、流転の我等どもの行にして、知らざるに仏の方よりぞ南無阿弥陀仏と一つに成じ、凡夫往生の仏とは成りたまへり。此の故に衆生の方よりは何一つも用意すべき事なく、全分

註 此の一句は國本においては(第四)の終りに置かれてゐるけれども、(第六)の文の始めの「四月四日の御文悦んで見候了」の言葉に照して考えると、此の一句は(第五)の文の肩書と思われる。

① 國本「四月四日の御文なり」なし

釋「四月四日之御文札にて承り候ぬ」

② 國本「念仏は」より(第五)の終りの「分別すべきものなり。」までなし。

③ 國本「正しく」なし

釋異本になし

④ 國本「ぞ」なし

釋異本になし

⑤ 國本「万行」「願行」

釋異本に「願行」

⑥ 國本にして「為めに行じて」

釋異本に「万に行じて」

⑦ 國本「知らざるに」なし

釋異本になし

國本「知らず」

に仏の方より、何一つも漏さず御認め候なり。是を心得て凡夫の往生を成じ給へるなり。

願行具足の名号を唱へながら、安心をも願行の不足なる様に思ふは儂はかなき事なり。譬へば万よろずの宝の充ち満ちたる蔵を父の手より得て持ちながら衣食を如何せんと思はんが如し。ことわりを知らざる人は、機の方より仏の願に取り付かんと思ふ。能く能く他力を心得て見れば、仏の方より衆生の往生を成じ給へる、南無阿弥陀仏の名号に、兆載永劫の行成じ玉はずば、我等が往生は思ひ切らまし。何ともなき妄想顛倒の心なれども、南無阿弥陀仏と唱へ奉れば、仏の五劫思惟兆載永劫の願行が、残らず此の中に納まる故に、さながら仏の恩徳にて、此の度生死を離れんずる事よと思ふ故に、すべて我が心の善悪にかかはらずして、適たまたまかかる機を渡し給ふ大慈大悲の忝けなきよと思へば、我等は常没常流転の悪ながら、やがてその心の底に、是をすてたまはぬ仏の慈悲の万徳が充ち満ちたりけるよ、と思

① 圓より「よりはは」

② 圓何一つも漏さずなし
釋異本になし

③ 圓是を……給へるなりなし

④ 圓圓の「を」

釋異本に「を」

註 「表現の仕様のない」の意

ふ故に、あまりの嬉しさに南無阿弥陀仏と称^①ふるなり。

故に、自力なる時は機の方より、仏助け玉ひ候へと思ふ義なり。

他力を心得て見れば、仏の方より衆生を追ひありきたまひけるを知らずして、今日まで流転しけるなり。仏の方より衆生を追ひありきたまひける上は、機の方よりとかう心得て、仏の御心に相応せんなど思ふべき事にはあらず。下下品の失念といふは、必ずしもこころを聞き分けて自力を息むるにはあらず。苦に逼^④まられて追ひ歩く根性の自然にやむなり。南無阿弥陀仏と唱ふれば、自然に他力の念仏三昧に同ずるなり。平生の時も構へて構へて此の失念の機に同じて、機の方より仏を追ひ歩く心を止めて、平に仏に撰取せられ奉りたる身なればと、ほればれと憑み奉るべきなり。此の位の心を、如是至心とも、除八十億劫の利益とも申すなり。すべて機より心をはげまして強くなすべき往生にあらず。全分に打ち任せて信じ奉るべきなり。

① 圓稱「唱」

② 圓轉り「る」

③ 圓圓轉とかう「覓かう」

④ 圓逼ま「せめ」

⑤ 圓圓同して「同ふして」

⑥ 圓仏を「なし」
圓異になし

⑦ 圓とも「とも云ひ」

今觀經に説き給ふ阿弥陀仏の名号をば南無阿弥陀仏と申すなり。

南無といふは凡夫の願を成じ給ふ義、阿弥陀仏と云ふは、我等往生の行に替りて成じ玉へる義なり。此の仏の名号を衆生が唱ふる時、本より凡夫の為に成じ給へる願行の功德が、此の唱ふる者の往生の願行となるなり。故に意に領解すといふは、仏の願と行とは凡夫の願行なりと領解し、口に南無阿弥陀仏と称ふるも、仏の願行が我が往生の願行なりと唱へ、身に礼するも願行具足する故に、此の外に別の安心といふものもいらす、横に万徳を撰して豎に過去未来現在三世を括り入れて成じ玉へる願因の名号なり。故に唱ふれば過去遠々へ上り、下は未来永劫まで至る功德なり。故に相續不斷の謂れも自ら一の名号に具足するなりと、嬉しさに唱ふるまでに候なり。唱へざれば仏にうとくなるにはあらず。他力本願の名号を称へながら能念のわが心にかへりて、深く願はば往生はしてんなどといふは皆よりつかぬ事なり。機の位へだにも心をかけたらば三界唯一心

① 圓替「代」

② 圓称「唱」

③ 圓撰撰して「撰め」
釋異本に「撰め」

④ 圓現在「現在の」

⑤ 圓下は「なし」
圓「下れば」

⑥ 圓に「と」

⑦ 圓称「唱」

⑧ 圓なんと「なんと」

といふ一心の位の法門に成りぬべきなり。他力といふは、全く機の心の沙汰もせず、唯願力を憑むと憑まざるとの不同なり。努々ゆゆめ機の心の深き浅きを論ぜざれ。さらばしてと南無阿弥陀仏といふは、其の自力の者は、名号の外に安心ありと思ふ故に、他力の名号を機の位に引きなして、自ら往生をば退くなり。仰ぎて本願の有りのままをすべすと唱へば、万が中一も往生せずといふ事なかるまじきなり。

本尊に向ひて念仏申し居たる二人あり。振舞は少しも替らねども自力他力の趣き同じからざるなり。自力の人は、如何にもして心も深く極楽を願はばや、仏構へて願ふ心をつけさせたまへ、欣よろこふ心も誠まことにあり、厭いとふ心も等閑なほざりならずば、なか迎へ玉はさらんと思ふ間、信ずる心発る時は往生も近々と覚え、妄念発りて心ならぬ時は、往生も遠々と覚ゆるなり、といふ。是は世に道心もありげ気に見ゆれども本願には疎きなり。衆生のはげみより往生を願ひ出ださんと思へ

① 圓さらばしてと「然るに」

圓「さらばかかる」

圓「さらば」

釋異本に「然るに」

② 圓へば「ふれば」

釋異本に「ふれば」

③ 圓中「なし」

④ 圓まじぎ「べき」

釋異本に「べき」

⑤ 圓欣「願」

る故に、是亦、仏の大悲にも窮めて疎き者なり。

次に他力の人は、心に極楽を願ふ信心いたくおこらず、妄念すべ
て止まらぬにつけても、あら忝なの仏の願行や、五劫思惟の願が凡
夫往生の願とならせずんば我等が往生は思ひぎりなん。我等が願行
を成じたまへる忝なさよと拝む故に、夜もすがら念じ日ねもす唱ふ
れども、自力にはあらず、念々声々に他力の功德が円満するなり。

自力の人は他力の願行に次第にうとくなる故に、やがて我と疑心
をおこして本願を疑ふ故に、摂取の光中にありながら光明の外へ出
で、本願の船に乗せられながら未だ乗らずと思ふなり。心の潔くな
るを待たんとする程に、諸仏の教化にも預らず、弥陀の三縁にも我
が方より疎くなるなり。ここが往生のちがひ目にて候なり。能く能
く心を静めて分別すべきものなり。

四月四日の御文悦んで見候了

① 圓圓種窮「極」

② 圓おこ「発」

③ 圓願「願行」

④ 圓圓ならせ「成ぜ」
釋異本に「成ぜ」

⑤ 圓心「念」

⑥ 圓おこ「発」

註 此の一句は圓本においては(第
六)の始めに置かれていた
ども、此は実信房の述懐と思わ
れるので(第五)の文の結びに
置く。

圓「札にて承候ぬ」

⑦ 圓の「なし」

⑧ 圓了「了ぬ」

第六

念々不捨者の文を人毎に料簡し煩ふなり。① 数を本として一日一夜② 一万二万乃至三万十万遍申す念仏は、今の念々不捨者の念仏にはあらず。③ 是は如何にも、さて、止む所のある故なり。④ 是は観仏三昧の位にして、機に立ち歸りて行ずる所の体なり。⑤ 今の正定業といふは、念仏三昧の位の、機を本とせざる他力名号の体なり。⑥ 是を念々不捨者とは云ふなり。⑦ 然れば即是其行の行体、仏の実体と成じ玉ふ所が即ち往生なる体を顯はす。⑧ ここには一念十念も機の功に仍らず、唯仏体の外に別に機の功を論ずる事なき所を、念々不捨者は名正定之業といふ。⑨ 即ち此を他力の至極とするなり。⑩ 然れば機の功の念仏によりて往生すといふにはあらず、念仏即往生と心得るなり。

第七

問。他力とは念仏によりて往生すといふにはあらず。念仏即往生ぞといふこと如何に心得べきや。

① 圓料「了」

② 圓「一夜」に

圓「一夜に」

③ 圓遍「辺」

圓「返を」

④ 圓者「なし」

⑤ 圓如「なし」

⑥ 圓體の「が」

圓なし

⑦ 圓圓圓稱位にして「なし」

⑧ 圓圓いふ「なし」

⑨ 圓行「なし」

⑩ 圓も「の」

⑪ 圓仍らず「非ず」

圓「あらず」

⑫ 圓別に「なし」

⑬ 圓事「とて」

⑭ 圓此を「此を即ち」

⑮ 圓圓機の功の「なし」

⑯ 圓いふ「なし」

⑰ 圓圓他力「或は他力」

⑱ 圓圓如何に「いかにもく」

圓「如何にも如何にも」

⑳ 圓圓や「事なり」

圓「ことなりや」

御答。他力といへども一念十念の功によりて、下根無智の者も往生すといふ分は、一念にても猶機の功によるなり。此の位は觀仏三昧なり。すなはち念仏によりて往生すといふなり。今、念仏即往生といふは一念も機の功を待たざる位に、決定往生を成ずる体なり。是を他力不思議の願体とはいふなり。是をば人毎に心得ざるなり。

第八

問。是を心得るに自受用他受用の位に約せば、念仏にて往生すといふ分は、他受用の、先づ我成仏して後衆生を化度したまふ位に当れり、念仏即往生といふ方は、今の別願成就他力の至極、自受用報身の位に成仏する刹那に衆生を化度すといふ事、先に是を承りたるを爰に更に思ひ合すべきかと申す。

御答。然ぞと仰せられ、是都て諸經の中に説かれざる所なり。正しく自受用の位にて衆生を化度すといふことは、今此の觀經に説き給へり。其の証普きものなり。故に仏の成仏といふは衆生の往生を

① 願願す「するぞ」

② 願願いふ分は「思ひわくるは」

③ 願願なり「なし」

④ 願いふ「なし」

⑤ 願持「持」

⑥ 願を成ずる「する」

⑦ 願なり「なし」

⑧ 願願願は「なし」

⑨ 願願位「二位」

⑩ 願先づ「先に」

⑪ 願して「の」

⑫ 願願願後「後に」

⑬ 願往生「往生す」

⑭ 願方「分」

⑮ 願願願成就「なし」

⑯ 願至極「至極の」

⑰ 願りたるを「なし」

⑱ 「るを」

⑲ 願願更に「なし」

⑳ 願願願と仰せられ「覚ゆる」

㉑ 願願願「教」

㉒ 願願願れ「なし」

㉓ 願此「なし」

㉔ 願願証「説」

㉕ 願普き「べき」

成じ頭はしたまふなり。然れば、仏の覚体成じ給ふ所を押へて衆生の行体と定むる故に、念仏三昧の他力の行とはいふなり。

南無阿弥陀仏といふは即ち別願酬因の報仏来迎の体なり。則ち是を往生の体といへば、声に唱へ出だす処は我が往生の色が声に出づるなり。是に付きて、念仏申すによりて仏の撰取して捨てたまはぬぞといふにはあらず。南無阿弥陀仏の体、本より我等を撰取して捨てたまはざる位の法体なりける処を心得分くるなり。故に臨終の体何時も来迎の仏体なり。念仏三昧、往生の体と心得るより外には別に臨終を置くべからず。又別に来迎を置くべからず。念仏即往生、往生即臨終なり。又来迎なり。之を以て念々不捨者と積するなり。是を他力本願の至極といふなり。

第九

問。往生とは、念仏を申すに遍数を一日一万二万乃至六万とも定め、是を日々に欠かさず、正しく臨終まで懈る事なく行じて、仏

① 圓融たまふなり「たまへるなり。」

② 圓「給へり。」

③ 圓仏の覚体「仏覚体に」

④ 圓給ふ「たまへる」

⑤ 圓圓融南無「故に南無」

⑥ 圓報「身」

⑦ 圓圓融則ち「なし」

⑧ 圓声「外へ」

⑨ 圓「別」

⑩ 圓撰取……たまはざる「撰取し玉ふ」

⑪ 圓分くる「なし」

⑫ 圓三昧「三昧を」

⑬ 圓「三昧の」

⑭ 圓圓融と「を」

⑮ 圓圓融に「の」

⑯ 圓往生、往生即「なし」

⑰ 圓積之「爰」

⑱ 圓すに「して」

⑲ 圓圓融遍教「教返」

⑳ 圓一日「一日に」

㉑ 圓圓定め「定めて」

㉒ 圓圓欠かさず「欠かさずして」

㉓ 圓圓臨終「命終らん」

圓「命終」

の来迎に預りて往生すべしと心得る故に、念仏若し懈らず、心自ら静まり、本願も信ぜられて覚ゆる時は往生も決定と覚え、又我が意も静まらず、行も日々に劣りて、念仏ものうき様な時は、斯うては何とも往生は叶はじと覚ゆるは、機根を本としたる心にて、今の念々不捨者の謂れを未だ心得ざる位なり。然らば是正しく念仏三昧他力の仏体に往生を成じける方に曾て心を置かざる故か。

御答。斯うぞと仰せられて、此の事左右なく人に言ふべからず。能く能く我が身一つに弁ふべし。意得ざる人に言ふは返りて誹謗ともなり、悪見ともなるべきなり。然るに諸経所説の法体は、皆解脱分の善根を持てる凡夫に、加すべきを加する位の法体なり。観経は無有出離之縁の機の上に成ずる法体を説くなり。則ち第三第五と分くる時、諸経には第五の機の上の法を説き、今経は第三垢障の機を度する所の法体を説くなり。故に機に第三第五と立つるなり。法も正因正行と定めて、正因第三の機を立する所が諸師に替りたる所の、

① 興解らず「倦まず」
 秘釋「倦まずして」

② 秘釋心「心も」

③ 興「ならず」「ならず」
 秘釋「ならずして」

④ 秘釋「念仏」
 秘釋「念仏も」

⑤ 秘釋ものうき様「夜々に倦みたる様に」

⑥ 興斯うては「斯くては」
 秘釋「かくては」

⑦ 興何とも「なし」

⑧ 秘釋「いかにも」

⑨ 興今の「なし」

⑩ 興者「なし」

⑪ 秘釋謂れ「所謂」

⑫ 秘釋釋然らば「されば」

⑬ 秘釋是「なし」

⑭ 興置「惜」

⑮ 秘一つに「独」
 秘釋「独りにて」

⑯ 興興返ふは「へば」

⑰ 興興返「却」

⑱ 秘悪見「悪義」
 秘「悪き義」

⑲ 秘釋なるべきなり「成りぬべし」

⑳ 秘持てる「もちあたる」
 秘「用あたる」

㉑ 興興加すべきを「なし」
 秘釋「加すべきに」

㉒ 興機「なし」

㉓ 秘興時「所を」

㉔ 秘釋を「と」

㉕ 秘釋も「に」

㉖ 秘釋替りたる所の「かわる」

和尚の御已証にて在すなり。此の機の上に定散の善を修して生死を離るるといふ事、如何にも叶ふまじきものなり。然るに、叶ふまじき事を叶はんずる様に思ひたるは、未だ此の機の有様を知らざる故なり。此の位にては、諸善は返りて一分も成ずべからざるなり。叶ふまじき事を叶ふまじき身ぞと思ひ知る所に一善修するに一切皆成ずる謂れ有るなり。是則ち正しく他力に依りて成ずる所なり。叶ふまじき事をば叶へんと思ふには成ぜずして、叶ふまじと思ひ知るところに成ずるは眞実他力の故なれば、形の如く修する善も、皆眞実の出離の因となる所を、諸教に替る今の弥陀教の他力報仏の一多自在の徳と習ふ口伝の義なり。

第十

又曰。左右なく諸経皆自力ぞとは云ふべからず。諸経にも自力他力を説く方あり。他力を説く方は是に少しく似るなり。

名号を押へてすでに往生浄土為体と心得れば、得生の土体失して

① 圓は返りて「も返りて」

② 彌叶ふまじき「叶間敷」

圓「叶ふまじき」より「成ずる所なり。」までなし

③ 彌稱一善「一善を」

④ 彌稱するに「善を」

⑤ 彌叶ふまじき事をば「なし」

⑥ 彌叶へん「叶ふべし」

⑦ 圓眞実「眞実の」

⑧ 彌も「なし」

⑨ 圓眞実の「なし」

⑩ 圓因「縁」

圓「業因」

圓「用」

⑪ 圓圓彌教「経」

⑫ 圓圓彌教「なし」

⑬ 圓圓の「なし」

⑭ 圓圓彌諸経「諸経は」

⑮ 圓圓自力……あり「なし」

圓「他力を説く方あり。」

圓「自力他力を説く方あり。」

圓異本に「他力を説く方あり。」

⑯ 圓彌すに「なし」

圓「聽て」

⑰ 圓得生「往生」

所去^①の地なし。故に行といへば、土を置いて、彼に生るべき行と心得べきなり。^{註1}

第十一^{註2}

問曰。彼此三業不相捨離にてある念仏ならば、惡の三業起るとも念仏なるべきや。

答曰。然らず。惡は機の相なり。念仏は機の外にして而も、余人の、煩惱即菩提といふ意にはあらず。其の故は、雜毒虚仮と習ふ行は、機によりて成不を論ずる善にて、煩惱の賊に害せらるるなり。

今此の三縁の行、機は煩惱賊の為に害せられながら、是に善根を失せざるなり。機は間断ありと雖も、行は念々不捨者なり。故に是を

① 輿輶稱所去「所生」

② 闕「所居」

③ 闕土「此の土」

④ 闕置いて「去りて」

⑤ 闕に「へ」

⑥ 極稱るべき行「ずべし」

⑦ 稱なり「なり云云」

註1 闕は以上十問答にて一本とす。

註2 これより以下(第十一)までの六段(節)は三縁義の文と略同にして文に出入あり、但し、順序不次第なり。思ふに三縁義より抜抄して述成に附記せるものか。対照して見るべし。

(第十一)の一段は三縁義の中、親縁の中の一節なり。

⑦ 闕三業起る「三業を起す」

⑧ 闕習「嫌」

⑨ 闕三縁「三業」

闕異本に「三業」

⑩ 闕失せ「失は」

水火^①二河中の白道に譬ふるなり。爾^②れば、念仏三昧は能婦所婦一体に成ずる相なれば、南無は婦命^③亦是能婦、阿弥陀仏は所婦なり。故に三業の悪は南無の体とは成らずといふなり。能婦の心に置きて成不を論ずる、縁^④の外の南無は六念の位にて、機によりて成不^⑤を論ずる故に、煩惱の賊^⑥の為に害せらるるなり。今縁^⑦の上の南無は、彼此三業不相捨離の故に、諸邪業繫無能碍^⑧なり。之を以て深心の積には、念々^⑨不捨を、親近憶念不断名為無間等と結するなり。彼の積に不問時節^⑩と積するを一念にても往生を成ずれば不問時節と積すと心得るは、尚機に約する位なり。不問時節等とは、修業^⑪の功を用ゐざる事を頭はずなり。一多を論ずる念仏は、尚善機の位にて正行の相なり。縁^⑫の念仏は、機の功に仍らざる故に他力の行といふなり。

第十二

問曰。機の外に行を立^⑬つるは、下品中生の文に、地獄猛火化爲清涼風と説けり。火といふは機の相なり。此の火即ち風^⑭なれば、悪即

① 闕二河「二河の」
② 闕爾れば「爾者」
闕「然れば」
闕「兩者」

③ 闕婦命亦是「なし」

④ 闕なり「なるが」

⑤ 闕不「否」

⑥ 闕論論する「論するなり。」

⑦ 闕縁「三縁」

⑧ 闕不「否」

⑨ 闕の為「なし」

⑩ 闕縁「三縁」

⑪ 闕障碍「碍者」

⑫ 闕不捨「不捨者」

⑬ 闕時節「時節等」

⑭ 闕積す「いえ」

⑮ 闕るを「…積すと」なし

⑯ 闕を「は」

⑰ 闕位「行の位」

⑱ 闕修業「修行」

⑲ 闕縁「今の縁」

闕「今の三縁」

註 此の一段は三縁義中の親縁の中的一節なり。

⑳ 闕立つるは「立つると云はば」

闕「立つといはば」

㉑ 闕風「風と」

ち善となるにあらずや。

答曰。火は機なり。但し此の機を離れて他力①顕れざる故に、機の上に法界身と成ずる仏体なれば、火化して風となると説くなり。さればとて、善悪不二といふには非ず。煩惱即菩提といふことは、定散の法の中を出でず、観仏三昧、或は正行の位④に論ずる位の法門なり。必ず因行果報の法門⑦になれば、必ず具足すべしと雖も、念仏三昧の位には非るなり。今の弘願の法界身の用、正因正行とは顯はるれば、法界身の謂れは、善悪不二とも説かるることは捨てざるなり。

第十三註

又曰。親したしといへばとて、理性の弥陀と思ひぬべき所を恐れて、不相捨離⑬として而も別なることを顯はさんと、彼此三業とは結ぶ⑭なり。

① 圓圓顯他力「他力の行」

② 圓圓顯と「とは」

③ 顯或は「異本に「等の成する」

④ 圓顯に「にて」

⑤ 圓顯位の「なし」

⑥ 圓顯必ず「必ず中間の」

⑦ 「中間の」

⑧ 圓に「なし」

⑨ 圓顯必ず「なし」

⑩ 圓顯用「用の」

⑪ 圓顯とは「と」

⑫ 顯は「にて」

⑬ 圓捨てざるなり「不捨なり。」

註 此の一段は三緣義中の最初の一段の一節なり。

⑭ 圓顯と「に」

⑮ 圓と「として」

⑯ 圓ぶ「する」

第十四^註

又曰。三心既具無行不成の謂れにて弥陀の体に帰しぬれば、弥陀の功德を残り無く身に具足す。故に、所為^①なり。定散皆南無阿弥陀仏といはるる時、九品の行と、名号といはるる体と分別しがたきなり。是を心得る様、定散は同じなれども、仏の功德に持たるる方に南無阿弥陀仏といはるるなり。是則ち仏と衆生と、彼此三業不相捨離と云はれて、三業離れぬ所を南無阿弥陀仏と云ひ顯はず故なり。此の方にて、仏の功德の定散、衆生の身には離れず成じ玉へる報仏の功德なれば、彼の体悉く南無阿弥陀仏と云はるるなり。又彼の定散の体を衆生受け取り、我が心の引方の行になして行ずる時、九品正行といふなり。然れば、一物なれども、仏に持たせていふ時と（衆生の方に行ずる時との）替目なり。衆生の方にては觀仏三昧の定散なり。仏の方に持たせ奉りて云ふ時は念仏三昧の体なり。すべて仏の功德の衆生の隔てぬ所に、南無阿弥陀仏^②といはるる体が立

註 此の一段は三縁義中の自余衆行の事の一段中の一節なり。

① 圓所為なり。定散「成す所の定散は」

圓「為す所の定散は」

② 圓と「の」

③ 圓同じ「同体」

④ 圓故なし

⑤ 圓には「を」

⑥ 圓体「仏体」

⑦ 圓り「りて」

⑧ 圓稱引「機」

⑨ 圓持たせて「持たせ奉りて」

⑩ 圓稱の「に」

⑪ 圓といはるる「の」

するなり。大事と申すは是なり。

第十五

又云。三縁は仏に付く縁なり。其の故は、観念法門に、行者の三心を内因とし、仏の三力を外縁とすといへり。此の縁に立する行は、証の位に約して、仏体に於て論ずる凡夫の行なり。故に他力の行といふなり。行といふは、機によりて顕はるるによりて三業に出づるなり。打ち任せたる行は因の位にて論ずるに、今の行は証の位なり。故に先は機に付けず仏に付けて即是其行といふなり。但し此の行を而も機に持たする故に、彼此三業不相捨離と成ずるなり。今^①は唯仏にも付けず唯機にも付けず親縁とはいふなり。

第十六

又曰。行者の三心を内因とし、仏の三力を外縁とすといへり。故に此の縁は他力なり。爾^②れば因縁和合等といふは、彼此三業不相捨離なり。故に、南無阿弥陀仏を仏にのみ付くれば所求に成じ、機に

註 此の一段は三縁義中の最初の一段の中の一節なり。

① 圓付くは「就ての」

② 圓証は「語」

釋異本に「語」

③ 圓證は「説」

④ 圓証は「語」

釋異本に「語」

圓證は「説」

⑤ 圓付けずは「つけずして」

⑥ 圓とは「とは」

⑦ 圓今は「しからば」

⑧ 圓付けずは「つけざるを」

⑨ 圓爾ればは「爾者」

⑩ 圓成じは「なるなり」

のみ付くれば自力の行となるなり。仏にも付けず機にも付けず、中間に置いて心得べし。是に仍りて念仏三昧を第九門に顯はすなり。能く能く心得べきなり。

第十七

一、自力他力の事

諸教の意は自力を以て正とす。他力を裏とす。之に付きて他力に三重あり。成仏に対して諸仏(の)浄土を説くは第一の他力なり。諸仏の浄土に対して西方別所求を説くは第二の他力なり。此の他力の上に立撮即行の行体は全く他力にて是れ第三の他力なり。

第十八

問曰。阿弥陀仏何事をか五劫思惟し玉ふや。

答曰。二百一十億の諸仏の浄土を知見し玉ふに、諸仏の慈悲に二種あり。一は随自意の慈悲、是は自力なり。二には随他意の慈悲、是は他力なり。此の他力の慈悲を集めて我が本願とし、此の本願を

① 圓付けず、「つけざる」

② 圓仍「依」

③ 圓稱なり「欵也」

④ 圓教「経」

⑤ 圓を「を以て」

⑥ 圓圓第「なし」

⑦ 圓五劫「なし」

⑧ 圓に「なし」

五劫の間思惟して、我が仏体衆生の行となるべき所を思惟し玉へり。是れ離三業の行願といふ者なり。偕さて離三業を修行すといふは、往生の行は仏体に成ずと云ふ。是を聞き得て証得する所を即便往生といふ。此の上に仏恩報謝の為に五種正行を修行するなり。故に往生礼讃①とも云ふ。因分修行といふは、自因向果を以て因分の行といふ。果分の行といふは、仏果を成じて其の上に修行するなり。故に知る②。今他力の往生は、果分の上の五種正行なり。

○瑞空本奥書

明治四十五年一月九日写終 洛西久世村祐楽精舎にて 瑞空祥純
大正九年一月廿八日 向日町物集女来迎寺にて拝写畢

西山末学沙門 諦空英純

① 圓云ふ「なし」

② 圓に「なし」

③ 圓とも云ふ「共云」

圓「に云ふ」

圓「共に云ふ」

④ 圓釋因分「因分の」

⑤ 圓釋自因向果「自因向果」

⑥ 圓る「ぬ」

○秘要蔵本奥書

浄土宗西山流秘要蔵卷五跋

秘要蔵五卷者、亮範大和尚壯年之昔所集也。一家密書罄無不尽矣。實是浄土秘要之蔵也。予遊学于広谷門下、雖不及見親筆之本、而幸借得学友覚道師所転写之本、從季夏晦日至孟秋晦日、恩々馳秃筆竟天保第十己亥年七月三十日 灰方村草堂寓居 桑門积音空謹記
天保十一庚子四月上旬 洛西大谷村於臥龍窟 研空 書写

○関本諦承本奥書

大正十二年八月 真空校正

述誠ハ西山上人ノ法語ノ趣キヲ実信房ノ親シク記シ置カレタルモノデアルト伝フ。処デ伝フル所ノ書ニ数種ノ異本アリテ、其ノ何レガ真ナルヤ甚ダ弁ジ難キモノアリテ存ス、予今回同法ノ友ニ請ヒ、其ノ寄贈セラレタル数本ニ就キテ校正ヲ試ミ^註新ニ印刷ニ附シ之ヲ世ニ

註 出版されなかった。
原稿のまま残されてある。

弘ムルコト、ナシヌ読者請フ之ヲ諒セヨ

西山ノ真空

○稻垣真哲本

維時 文化十三年丙子七月廿一日拝写之竟